

教師がこどものことばを「聴く」ことの意味を問い直す

—教師の振り返りを手がかりに—

白井 敬 高度教職開発コース

キーワード：ことば，聴く，関係作り，授業作り

1. はじめに

私は、国語科の教師として子どものことばを育てる楽しい授業をしようと考えてきた。様々な言語活動を通して、何とか話させよう書かせようとしてきた。しかし、表現することを求められることで、体を硬くしてうつむいてしまう子どもがいた。

「何でもいいから話してみて。友だちや先生の真似してもいいんだから」と、近くに行って顔を近づけ、耳を傾けるふりをする私。しばらくして、私は沈黙の時間に耐えきれず、「何でもいいからね。話せるようになったら教えてね」と、逃げるように他の子へ視線を移した。優しいことばを使いながら、無理矢理口を開かせようとしていたことを思い出す。あの時、Y児の内に響いていたのは、どのようなことばだったのだろうか。怒り、悲しみ、疑問。固く結ばれた唇は、私への無言の抗議だったように思う。私は言語活動を充実させようとして、言語活動そのものが目的になってしまっていた。ことばをインプットすればアウトプットできるようになると、子どもをまるで機械のように考えていたのだ。無理矢理口を開かされるような場で、子どものことばを育てることなどできるのだろうか。本研究では、私自身の実践をもとに、私のことば観・授業観・子ども観の変容について記述していく。さらに、教師が「聴く」とはどのような行為なのか検討していくものである。

2. 教師のことば観の変容

10月のある朝。澄んだ空気の中、T児と一緒にミニブタのぶーちゃんとの朝の散歩に出かけた時だった。「ぶーちゃん、お化け屋敷」。私の後ろに隠れたT児が言った。私は一瞬、何のことかわからなかったが、「怖いってということ？」と尋ねると、T児は、「ぶーちゃん、押すとお化け屋敷」と言った。

2.1 ことばを仲立ちにして温かい関係が生まれる

私の後ろに隠れて「押すとお化け屋敷」と言ったT児の姿で、これまでのT児とぶーちゃんとの関わりを思い出した。そして、怖がって触れられなかったT児が、私と共にぶーちゃんに関わる中でぶーちゃんへの見方を変えていったことを感じ、今まで知らなかったT児の変化が見えてきた。T児と一緒にぶーちゃんを散歩しながら、私はT児と私の間に、これまでの経験や思いを共有できた温かさを感じた。

2.2 どのようにことばを聴くのか

これまで私は、一般的な意味を正しく受け取り誰にでも分かりやすく伝えることだけが大切なのだと考えてきた。子どもの経験や思いを聴かずに、教師が持つ「正しいことば」の枠に合っているかいないかという見方でことばを聴いていた。しかし、ことばとは、その子の経験や思い、それまでのいきさつやその時の状況で、何のために誰に語られているのかということと切り離せないものなのだ。そして、私の後ろに隠れながら話したT児のように、言語として表現されていないものにも意味がある。私は、ことばの背景にある経験や思いまで聴きたいと考えるようになった。

2.3 授業で語られることばを聴く

「正しいことば」だけを聴いていた授業では、子どものことばの背景にある経験や思いを切り捨て、記号としてのことばを語らせたり書かせたりしていた。私は、授業でも経験や思いを共有できた温かさを感じたいと考え、授業の中で語られる子どものことばの背景を意識するようになった。

3. 授業の中でことばを聴くことで見えてくるもの

3.1 安心して語れる関係を土台にして、子どもの思いが表れる

K児は祖母の葬儀をきっかけに「自分が死んじゃったときも、あんな小さな箱に入れられて冷たくなって熱いかまどに入れられちゃうのかと思うと怖すぎて。死ぬのが怖い。死なれるのも怖い」と、死を恐れ、パニックになり眠れなくなってしまった。『ずうっと、ずっと、大すきだよ』という物語の、死んだ飼い犬を埋葬する叙述について語り合っていたときのことだった。友が、「普通さ、人間はさ、燃やして骨にしてさ」や、「おれ分かるよ。だってつい前ね、ひいおばあちゃんが」と語るのを聞いたK児は、一番恐れていた火葬のことを、「死んだら着物着せて箱に入れて焼くんだよね」と語り始めた。

【1年 国語『ずうっと、ずっと、大すきだよ』の実践から】

K児の悩みを知っていた私は、この場面をK児がどのように受け取るのか不安だった。しかし、K児は一番恐れていたことを語り出したのだ。私がいくら「分かるよ」、「話を聴くよ」と言っても、K児は語らなかった。授業ではどうして語り出せたのだろうか。

竹内(1999)や細川(2017)は、この人ならばありのままの私で安心して話せるという感覚が、ことばを表わすために必要であると述べている。

私はK児の姿から、「分かるよ」と共感したり、自分の経験を語り出ししたりした友のように、自らの経験や思いを伝えながら、経験や思いを共感できる関係がその場に生まれたときに、「受け取ってもらえる」と安心して思い表すことができるのではないかと考えた。私は、子どもたちのように自分の経験や思いを込めたことばをK児に語っていただろうか。私自身がありのままにできなかったのだと気づかされた。

3.2 子どものことばによって作品の読みが深まる

K児は、物語の空白部分を指さし、「なんでここだけ空いてるの。死んじゃって悲しいと、エルフを庭に埋めたで分けるとさ、こっちの死んじゃったがさ、すごく強い思いになるかもしれないじゃん」と語り出した。教師は何のことかわからなかった。

【1年 国語『ずうっと、ずっと、大すきだよ』の実践から】

空白が表していたのはエルフの死から埋葬までの時間。あの空白こそがK児の恐れていた、「死んだら着物を着せて箱に入れて焼く」時間だったのだ。そこをみんなと考えたいという思いがあったのではないだろうか。

私は教材研究をしていたとき、空白の意味については意識していなかった。K児のことばによって空白の意味に気づいたとき、私は打ちのめされたような気持ちになった。子どもを下に見ていた自分を突きつけられたような気がしたのだ。「書かないことで豊かになる」という物語の読み方を学ぶことができたはずなのに、私は問い返さなかった。問い返してしまうと「自分のことばは伝わらなかったんだ」とK児を傷つけてしまうのではないかと考えていたのだ。

子どもの読みは私が気づかない作品の価値に気づかせてくれる。子どもも、私と共に作品を読む一人だ。子どものことばには、その子の経験や思いに加えて、歴史的・文化的・社会的な価値が含まれていることを意識して聴かないと、そのまま過ぎ去ってしまう。教師が価値を意識しながら子どものことばを聴くことで、どのような姿が見えてくるのか見ていきたい。

3.3 教師も子どもと共に価値を求める一人として

S児は、見ることと聴くことにつながりがあると読んでいた。教師も物語の価値を「まなざし」に感じ、授業の中で、子どもたちが「見る」という叙述にふれた発言をした時には、拡大掲示した本文に線を引き、挿絵の動物の目に「見てる」と書き込んでいた。S児が友のことばから「向き合う」とはどういうことかと意識しながら、改めて本文を読んだ時、「動物の言いたいことが分かる」ことと、「目線が向き合う」ことがつながったのだろう。思わず立ち上がり小走りで拡大掲示した本文の挿絵に近づき、「この挿絵ともつながってる」と笑顔で語り、さらに、「みんなも話してる時は、こっちの方見てるじゃん。友だちの方を」と、友だちが今していることなんだよと、物語と今をつなげて語った。

【3年 国語『もうすぐ雨に』の実践から】

S児の読みと私の読み、そして友の読みを、物語とつなげようと考え合っていた。どれか一つの読みが正しいのではなく、それぞれがどのような思いで物語を読んだのかを語り合うことで、物語の新しい読みに出合うことができた。S児は、何を言っても受け取ってもらえる安心感の中で、自分の発見を表し、友に伝わっていないと感じると、友に分かつ

てもらおうと、友の姿を例に語りかけていったのだ。安心して語り出せる環境の中で、自分の思いが伝わらなかったとしても、その思いを追いかけるように表現の工夫を始めるのではないだろうか。

4. 教師がことばを聴くことの意味

以上の事例から、教師がことばを聴くことの意味を振り返った。

4.1 ことばを仲立ちとして背景にある経験や思いを共有し、関係が変化すること

ことばの背景にある思いを知ることで、短いことばにもその子の経験や思いがあることが見えてくる。子どものことばの背景にある思いを聴くことで、子どもの見方が変わり、関係が変わっていく。

4.2 安心してありのままでいられる関係の中で、子どもはことばを語り出すこと

教師がありのままでいることで、子どももまたありのままの自分で何を言っても大丈夫だという安心感を持つことができる。安心感の中で子どもは自分の内面にあることばを語り出すことができる。

4.3 子どものことばから価値を見出し、共に新たな価値に気づくこと

教師が教材研究をしたり教養を磨くことによって子どものことばの中にある価値に気づいたりすることができる。また、予想外のことばにも耳を傾けられるようになる。

4.4 安心感の中で思いを伝えようと表現の工夫を始められること

伝えたい思いがあるときには、問い返されても分からないと言われても何とか伝えようとする。思いを本気で分かろうと聴くことが、表現を育てることにつながる。

5. おわりに

本研究では、教師が一人の人間としてありのままに子どもの前に立ち、子どものことばの背景にある思いや経験までを分かろうと聴くことが、子どもとの関係を変え、物語の読みを深め、子どものことばを育てていくことにつながると捉えた。しかし、実際の授業では、教師の予想通りにはならず、瞬間瞬間でどのような選択をするかが求められる。これからも、私自身の行為を振り返り、問い返ししながら、子どもと共にことばを育てる授業と私の在り方を求めていきたいと思う。

文 献

竹内敏晴 (1999). 教師のためのからだことば考 ちくま学芸文庫.p88

細川英雄 (2017). 言語・文化・アイデンティティの壁を越えて—ともに生きる社会のための対話環境作づくりへ. 佐藤慎司・佐伯胖 (編) かかわることば 東京大学出版会. p.201